

理学博士 牧野富太郎 創始 主幹 薬学博士 朝比奈泰彦

植 物 研 究 雑 誌

THE JOURNAL OF JAPANESE BOTANY

第 29 卷 第 6 號 (通卷 第 317 號) 昭和 29 年 6 月發行

Vol. 29 No. 6 June 1954

本 田 正 次*: イワウチワの三地方型

Masaji HONDA*: The three local types of *Shortia*
uniflora Maximowicz

関東の山では 4 月、北陸から東北の山では 5—6 月の頃、森林下に美しい可憐な花を開く山草の 1 種にイワウチワがある。従来は淡紅色の花を開く正常品と、白花を開くシロバナイワウチワの 2 品を区別してあるだけであつたが、よく注意して見ると地域的に大体三つの型に区別が出来るものと思われる。その第一は採集地の関係から私達が最初からイワウチワの名で呼んでいた私のいわゆる関東型で、奥多摩の高水三山、鋸山、大日向山、秩父、三峰山、少し飛んで上州の妙義山、日光の白根山などに見られる葉の—ばん小さい型 (普通 2—3 cm 幅) で、東京の花屋に出ているのは多くはこの型である。けだし地理的關係もあろうが、山草としての觀賞価値はこの型がこれから述べる他の型に比べて優れているように思われる。

第二は東北型とでもいうべきもので、私の見た標本には岩代の飯豊山、越後の村上町、羽前の月山、同じく金峰山、羽後の森吉山、陸中の猿岩などがあり、葉の基部は関東型と同じく、或はそれ以上にコルデートしているが、何としても葉の大きいことが目につき、幅は普通でも 5—6 cm、大きいものは 8—9 cm に達し、如何にも岩団扇といった感じの形である。

第三の型は北陸型ともいうべく、葉の大きさは関東型と東北型との中間をゆき、幅 6 cm は大きい方で、普通は 3—5 cm 位、基部が他の 2 型のようにコルデートすることなく、一文字に裁ちぎり型か或は円形、或はむしろ楔形をなしている個体もあつて、この点が著しく違つている。標本は越中の黒部、同じく立山、能登の宝達山、越後の駒ヶ岳、上州の谷川岳、岩代の飯豊山などのものを見たが、飯豊山に第二の東北型と第三の北陸型の両方が見られて整理上は一寸困るが、場所柄とて両方があつてもさしつかへはないだろう。

* 東京大学理学部植物学教室, Botanical Institute, Faculty of Science, University of Tokyo.

さて次は学名や和名の整理となるとこれは一寸難事である。今にわかに Maximowicz の原標本を見る由もないが、原記載だけでは果して以上3型のうちの型を指しているのか不明であり、産地も本州中部から東北に及んでいるが、大体を綜合すれば関東型か東北型かの何れかであろう。増訂草本図説の図を見ても北陸型と関東型とを併せて描いてあるように見える。従つて的確な分類とはならないかも知れないが、今暫定的に第一の関東型を基準と仮定してこれに *var. uniflora* の名を与え、イワウチワの和名もこれに与えて、以下次のように整理して置きたいと思う。

Shortia uniflora Maximowicz

var. uniflora Honda *var. nov.*

Folia vulgo 2—3 cm lata, basi cordata.

Nom. Jap. Iwa-uchiwa.

Hab. Honshū: in monte Shirane, prov. Shimotsuke (S. Okubo, anno 1878); in monte Myōgi, prov. Kōzuke (S. Okubo, anno 1878); in monte Mitsumine, prov. Musashi (T. Nakajima); Chichibu, prov. Musashi (J. Matsumura, anno 1878); in monte Ohinata, prov. Musashi (J. Matsumura, anno 1878); in monte Nokogiri, prov. Musashi (M. Mizushima, anno 1947); in monte Takamizu, prov. Musashi (T. Makino, anno 1895).

form. **albiflora** Makino in Journ. Jap. Bot. 8: 43 (1933).

Nom. Jap. Shirobana-iwauchiwa

Hab. Honshū: mihi ignota.

var. macrophylla Honda *var. nov.*

Folia magna, 5—9 cm lata, basi cordata.

Nom. Jap. O-iwauchiwa (K. Hiyama).

Hab. Honshū: Murakami, prov. Echigo (D. Shimizu, no. 448, anno 1926—typus in Herb. Univ. Tokyo.); in monte Iide, prov. Iwashiro (T. Sawada, anno 1923); Saruiwa, prov. Rikuchū (M. Honda, anno 1945); in monte Kinbo, prov. Uzen (F. Maekawa et H. Hara, no. 76-A 324, anno 1937); in monte Gas-san, prov. Uzen (T. Yamazaki, anno 1942); in monte Moriyoshi, prov. Ugo (Y. Hatakeyama, anno 1952).

form. **albans** Honda *form. nov.*

Corolla albata.

Nom. Jap. Shirobana-ōiwauchiwa (nov.)

Hab. Honshū: in monte Moriyoshi, prov. Ugo (Y. Hatakeyama, anno 1952—typus in Herb. Univ. Tokyo.).

var. orbicularis Honda *var. nov.*

Folia orbicularia vel ovato-elliptica, 3—6 cm lata, basi rotundata, truncata vel subcuneata.

Nom. Jap. Tokuwakasō.

Hab. Honshū: in monte Iide, prov. Iwashiro (G. Nakahara, anno 1903); in monte Komagatake, prov. Echigo (B. Hayata, anno 1903); in monte Tanigawa, prov. Kōzuke (T. Yamazaki, anno 1944); ibidem (M. Takeuchi, anno 1948); ibidem (H. Ono, anno 1948); Kurobe, prov. Ecchū (M. HONDA, anno 1927—typus in Herb. Univ. Tokyo.); ibidem (K. Shinno, no. 5, anno 1932); in monte Tateyama, prov. Ecchū (M. Hashimoto, anno 1936); in monte. Hōtatsu, prov. Noto (T. Sawada, anno 1923).

本草図譜卷之十七にトクワカソウとして越後産のものが図解されているが、恐らくこの型のものを指したものと思われる。

以上の私の観察とほぼ同様な観察記事を檜山庫三氏が既に昭和 18 年の「野草」に発表しておられることを後で気がついて汗顔の至りである。従つてオオイワウチワの命名者を檜山氏に置換えたなどは後からの処置であつて、最初は筆者自らのつもりであつた。なお昨年の夏、加賀の白山に登った時、北側の岩間温泉から尾添に向かつて下る途中でも北陸型のトクワカソウを見た。

〇ツクシマムシグサ (原 寛) Hiroshi HARA: *Arisaema Maximowiczii* Nakai

東亜植物図説 1 (3): t. 22 a—c (1936) に前川文夫博士が図解された志摩産のテンナンショウの 1 種は、葉が通常 1 枚で偽花梗は短く、仏焰苞には著しい白い縦縞があり、その苞片は下部が 3 角状卵形で中央部は半透明な灰白色を呈し、先端は急に細まり長い嘴状をなして初めから直立している点が特に顯著で、肉穂花序の附属体は細い。これは後に中井博士によりシマムシソウ *A. simense* Nakai (1936) と名付けられた。中井博士はこれに近似の北九州産のものをナガハシマムシソウ *A. angustifoliatum* Nakai (1937) として発表され、又同じく九州産のものを本雑誌 15: 414 (1939) にシマムシソウの新変種として記載された。しかしこの植物はそれより約 10 年前にツクシマムシグサ *A. Maximowiczii* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 42: 454 (1928) と命名発表されている。これは Maximowicz が 1863 年九州九重山で採集した標本に基いて書かれたもので、その複製本を私は 1939 年に見て写真をとつてきた。本種は今のところ紀伊半島と北九州の山地から知られているが、今後その中間地帯からも見出されるかもしれない。今 (4 月末) 私の庭で肥前多良岳から採つてきたものがその特徴のある苞片を立てている。